

卷之七  
松原  
全

911.3
7



葛の巻原



野盤子支考述

潜淵菴不玉撰

○冬の雪の巻かゝる心算を志す秋家人もわ  
かぬ水無月のさぬをまじとらぬ  
何とて淵よかか鳥たたく飛ぶ  
とうとうみ釣取つてむ算の字を志す  
と何事成りぬ心算はよと心算

朽もいさねの原らうー世乃風雅より志と  
とすか人も万分うーもわづか癒うーは  
是故よ支考う隨園を志うーして東の人乃  
記念よをほくく作り

○芭蕉庵の雙ツキナ一目略葉よう終ふ曰う風雅の世  
よ初り道こをふたうーとほ雪の凡よ臨  
めわうらうー一面と皂狗とわう一面を白  
衣とわうくたようう終るまよとまうん

うわうーの中間の一程わうーとまうま  
を武江のわよ閑然くまを静うーて悠々  
暮ううく凡やうううあうーて花の落るま  
わをー孫生もな妙わうーこはうやあ  
あ心蛙の水よ落る音まうくわうー  
言わ乃風情この筋よううひて蛙飛らむ  
水の音とわう家七五まわあつりあう晋子  
う傍よわうううう吹とわうまよまよとわう

ひ〜〜 せんじつとをさうぶきつらん 唯右  
比とらしむるやめきつらん 論之の如く  
ひふふまの凡論〜〜〜 ねやうかまこと  
古比とひふふまを質素ありて實也  
實を古今の貫道なきとね〜〜〜 ねと  
華實乃如〜〜のさやの如くのものめねあ  
〜 材幸人のひ〜〜かもねむと後家  
まのひか〜〜もてやもかむもほ〜〜

定家の郷もこの節よあはひ終ふとて國情  
〜 也 志うふと〜 次のうも〜 ためまは  
〜 推して唯右比とね〜 ちか〜 ちか〜 ちか〜  
〜 ね 頓阿法師を風月の情よさ〜 ちか〜  
〜 ちか〜 菊好洋弁のひと先終ふとて律よ  
殊勝の交なり

○ ちか〜 風雅とね〜 ちか〜 ちか〜 ちか〜  
〜 ちか〜 孔子の三百篇ハ草木鳥獸のひ〜

たむをまゝ〜先倭よと三十一字とけね  
て上下の情〜〜〜〜〜  
〜わら草木本る黙のくらけ〜として高下と  
形密と釋〜もけの〜  
〜〜〜排諧と〜  
根の持論と〜  
〜は〜の〜と〜  
〜の古今集の〜  
〜の排諧の〜

〜の者ら〜  
〜の言論の〜  
〜の世の  
〜の凡雅と志のり  
〜の是あり〜

〜の俳諧ハ如來禪の〜  
〜の線の〜  
〜の即轉の〜  
〜の禪の〜

知りかたしねとす心のきんといひあつて

むたさか

○俳諧は古人のしごとを真をとり紙屋の  
史はのよおきよひしよつれ

○世の風雅はらそもの者も月花とてくひくま  
やいしははのりあつて先となあつての野  
り家の中はこもつらきものもつとて  
まやとてしをきあふもなるとつてね

真信夫郡  
塩屋  
列

後へはいもいひやまをひとひふせまよて  
あゆみをねるとつれとてまろつて老杜は呼  
児向者魚ラもつとつて古人の語意と用家  
ま一字す言もなやまかつたといひぬゆり  
後ふよとて稱ひやうとて姿もつてくま  
いひ物つとむい貴女公子は電きつとあ辨  
利のたつとくまゝなつて

○晋子も鉄炮といふまゝのいひ雅とつとくま

よまらうとくらへてふくむやれなり一集よ品よく  
はとつよ忠の論と微細のともつ所かくせし心  
をとく先んむ殊勝の心さし心とくや  
一晋子の語路ゆかじの酒盃よ流きとりて  
つよ人ありに宋伯宅編よの自氏り二千八百  
言飲酒の詩九百首あつとと答へたりとつ  
と晋子の性人よまらえれ所を樂天の飲酒と  
か紙かきりありまらそとく用入るまのたはる

作りぬ

○風雅の序も一紙ゆめありのたまよく名  
苑の一すふをそとく始終の妻作サをく  
次世句ハれり一かすせの句ハ味なり一  
つよまこと一すふよとけりあまはるか  
一句のよと不説一しひらぬとけり一  
屋とあして中品の眼をとく先んむと  
かまは轉換変化角のつよつ情實の

中ふりそり舞

○ころは一般の才人ねせ候〜ふ詞をこの  
針灸秘訣の訣をきり〜とふひ出さ  
よき〜ぬもれもきり〜にき家もれいふも  
ちり〜とをれ〜めた〜田舎人其率  
都婆を橋よ後きり〜おふ人の罪障  
懺悔をれとやの理いあ〜ひと心  
うき〜とやハねもよ唐李之藩ハ夜深

枕觸<sup>ネ</sup>膝とつよ白をさ〜後よ削り候〜せ  
りや

ふさかかゆ夏も心と〜きりあ  
た〜やんおほ〜とゆも清  
もちり〜りきれ〜は寝り〜右と  
きおのま〜眼をむ〜とわりや聞ぬるやと  
り〜とち〜んさ〜ら〜む〜ら〜ふ  
ね〜心けふか〜と故なる〜春草秋鳥乃名



○一也の秋葉の舞の糸とのひをたてて  
あつてはつた三つ湖南の珍碩のひをたて

あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた

あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた  
あつてはつた

くんとてしつて同ひけつるお花の葉あり  
ハ酒を了りぬ飲るるれと答へられはさくハれ  
乃道も皮骨ハおめるるを阿使もあつて  
まれしや支考り東の此風種ハいつり  
しつんとてよふ人あはれハ人ハ此考り  
しつんとてよふ人あはれハ人ハ此考り  
ハの奥に僻しとてまこと寂寞をやられま  
あつて平吞よまひしつて口お

鎌倉と生く出くじ初カワラ經  
五月ぬよかられぬ世多た

梅若菜鞠子此者のとらけ

詩号よらん所を用ふまふやとわか  
くこれ初經ハ支考り東の此風種ハいつり  
支考りまふしつてよふ人あはれハ人ハ此考り  
とらよ鎌倉のみまよ又此のわあつて  
まふしつてよふ人あはれハ人ハ此考り

阿婆もめくさる神々も徴幸  
よむるめくさる神々も徴幸  
ういをひくか入るひくか入る生死は  
神よ方くくん志くく風程よあき人  
もゆよて嫌くくをゆく鯉のいよ武江の  
尾ちかしくぬくくをゆく世の歎相よの  
とくくくまい向いりあもかきかき  
ぬの埜そよぬやんぬかきかき

五洲何く倭よの二二も邊愈くん  
縁多とくくはもの古今の操措とも  
むくくく又章よの結前生後の詞と  
まハ今れ恙業のくくくくあきく  
心をさるんかもくくくくあきく  
はくくは法かむくく南のくくく  
の人の始よまゆくくあきくく  
れ理もくくくはかむあきくく

らされや

角之まやかの聖人のた為 其角

阿叟のくく先くく先お生後ノ詞を自ひ晋  
子ハくく先くく先のまれ風情を考へ古今俳  
諧のまらくく先くく先とよた人もくく先くく先

致極よ夢の浮くく先くく先 同

定家のくく先くく先のくく先くく先くく先くく先くく先

かわりぬくく先くく先晋子も自讚くく先くく先くく先くく先  
れくく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先  
のくく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先  
世人の口意くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先  
かたくくく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先  
くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先くく先

キビ 紐の糸あや擔よまらふ玉糸 孫碩

浮言よ流流よまらふ玉糸 支考

美しきものもぬくうたふとをかなふ無心所者入観  
相かしくうらふととあわくの千載の在子と  
まらとらばあゝ舞

○趣向の古きと夏のしを附とくうらひしし  
句はくると先つしきうとをくむそ不変入  
正道とく道つしを先つしきま夏れり  
しつしよまあゝねと人のくゆははのよ夏と  
このむかぬとふかなはるるあまよひゆ

ひとよた人のかみ

○毎句先つしき名目をこのむの中分下  
の他かたへし何とぬくむむゆる句よもむ

うかりとるうらよたのしんあのおをん格の  
あふぶあをさひあしゆしむ釣懸ひさや  
ふさゆかたれは句よはゆり雅を減ちくぐら  
夏ふとくまをまの後にんかしのわくあや  
よこゆとさひの伽夏とひふなれいふ

何き向くことやかなあつてこれのことか  
花のむくく石臺とをくをけむじとわ  
をくゆるふのさかたぬのくをかじむ

○月花よかきくは春秋の季と結むじよせら  
まよとくはよエまをはあきくき趣向の  
へく隆平生の心く当季の後よくらく  
くくくくもや曲水歳且の才三よの葛  
菴よ花の端綱のすゑ振くくくく葛菴

うら趣向へ起つて花は最後の一夜あ  
鳥獣よ木乃用とくひけきくかむく  
あきゆ

三味線や芳聖のく月ぬ 曲水

世向き人のまろきくは風情なるもわく  
これらのこあきくかぬきくふか  
菊は燕よのあははくくくくく  
か海国の中よ東坡く九相の圖あき掛た

じそみ月夜入勢さほり初かろく

○發句ハカク向くふとわらふのしんをえんち

才一れエまかろく

幸崎の松を花よりあつらふ

世句錦をこころしほり人のこころ好悪の

人そまろし終りて先たよく起定轉合入四

格とまきか人も才三のとゆりハカクおぼ

又まじさしゆらとゆまをまじりハ一生と

返魂の烟の中よかちりふり終りむく凡雅

凡雅 <sup>ツミンド</sup> 罪人かこむ世句花のまかろくさくハ

凡

○洛の和及法師ハ宰人やこころ五文字と

一生とあやまき終れと幾く湖南の豊

とまろし前の秋なこむ心さくハ

終りぞめさかのはりハ

くも世の風雅もあはれ

流水飛禽の情もよき次湖南の叟とむ  
とむまはり柳の冥思もよき花をゆくとむ  
庭前より西より人のさふよまふ玉の小柳  
とよゆらうとまらうとよき徳とまらうとゆらう  
せん

鳳来寺

六曜 夜まほしう祈り出で柳のれ  
草ゆと霜ふはやうの花

かた方よりぬのくをせしもらうとよき  
ゆりいさうとせん

ほろくまは峰也五人の萬草

雪や餅よ薫と花椽のうた

かの僧の和及まかたをまらうとよき  
そ今を悲うとよ人の教がらうと

○杜国を心うとよれねのこねらうとよき  
目ゆりくうとよき



○今ハあさきしんせからまきしん 詩子ハ  
たのまう文まよと申ひ凡種よハ人の詞をぬ  
とじ前後のぬうひ是非なり

○集歌しハこのつひの文字と更しハくはま  
まよと申しけし心ねしちらまししる者も  
ふまらしハわしむかふしハの文集よハ古人  
ハまのいさる文字ハ形容あましハゆるやし  
まらしハ莊子の帯形ハの尾よはちある心地ま

己

○詞とけくしハやしハのまじとと心ハ精進  
ゆまらしハ心客ハとまらしハ心まの凡  
流かまらしハもけしハひと果を合類節用  
凡ハ心地まを免

○林下何曾<sup>テ</sup>是一人とハ詩ハ何曾の二字ハ  
有くハと評をらま志ハ心ハ老杜ハ秋興ハ詩  
ハ野航拾受兩三人とハ何曾のあらま

か心恰受乃不可思議から詩もろくは  
凡雅から張藉う賈嶋よまきつら詩と二三  
馬橋まきくハ和音のよもほくハ  
入誰家とつよまきくといふてまきく  
まねハ又まきくハ  
おのまハ  
はまハ  
とりまきくハ僧の鉢を所らして

もハ  
まよハ  
さのま

○この比くハ  
まよ言系ハ  
まねハ  
めれハ

○晋子ハ宿れハ

阿叟もほのよやうなれぢー

出らうととらふ詞を養文入よなれらうとて  
— かつとと

おつらうや 幼らうよおらえ 嵐雪

嵐雪う幼の一字とて人は教りの渡とつり  
きゆやたらく馬上の熟盛アツモリと給うとわら  
よ甲のえんこらうとわらうと頬の紅も

残よましく髪のはらばらなをちりさやうく  
二八の美ゆきひららん髪らおぼらう後入とた  
あいらしくや

○世よ切字の登句とてよ夏あうく  
酒のゆきさうなれらひの夜は雪

○白の染ゆきあうぬハ趣向のゆきよまてと口と  
よしやうさうかを心故がわと晋ふの道は  
ゆら木切のまなをうとたう

簾中よ袴と蹴こむしりるを聲よとかくる  
あうおきしつりしとせ雲田の會席よふは  
せとこたりのせあ方とらんよ長椽よ銀うり  
きんおとこさしつり銀のこまけよ奇特  
かたし

精鯉のゆきと浮かよふ座の曲 大坂 車庸

雉子唄一宮治の茶まねは後武 さ 昌房

あうくと目とほきなくも秋の凡と無念相

のうらまのつふか三生のと薫修がらるるれハ朝  
暮のわしのかかぬ形容わのくせの比とと  
らん

河原よ笑はるる新海嵐の如行 ミナト

如行とよらうあれたのこなれとかの夏のあまよ  
るふも世の介やとんしんちんちん

煤とひしつとあおのちを 松凡

藤とちやめはひんも持しねを 支考

貞信六郡  
塩屋  
瀬上

おのづから武洛のそよと  
もくろみ先人の取捨をありと先と志れり  
かよところ異なり黄連の苦し  
何より候し何しそむもこの乃よを  
辨利か

惟子と流りぬよ心な妙なり 正秀

正秀の性は何しか心微細の風情よあま  
て曾良の文和路の般路をく先人の角を

おのづから何しとくや措は吹入る秋しと  
もくろみ何しとくひぬく肌たのよと心な  
の人たのき家風情なる心新ともあつて  
わら案じよぬと心凡雅の周知つら  
くすく阿嫂もくつふしと

を返葉をなぬ心と秋凡 路通

一生の風雅をこの中よそと先人な心  
しと初書よ根をのこしと

花は江戸の花の比しせよもさういふるなれ  
と移領りしおまじつ阿婆もねししと  
ねしし物と我と世情さくし

大平月や朝と何れもはなす

まゆ月のまぶ絲とつよめの清少納言もな  
あつらふとむしとあつらふと風情の動さ  
とつらふとつらふとつらふとつらふと道  
じ

鉄炮の遠音よ雲るお月お 聖徒

かか付とくらおの参差よ月あつらふと鑑の  
月まはよ心さうれて洒落堂の卯のむの浪を  
もねしとねねとねねの桑向の卯のくさ  
とつらふとつらふと

○住吉神送

松さくも林もなす乃とさくし  
大坂 之道  
屏さくつ路のさくも棧 遊刀

娘もろりめさしきよや桐の花 乙列 荊口

板もろりや秋のやまのけしき 乙列 落梧

筆よをひわく秋の夜更 乙列 探志

草刈の子き一握 乙列 不玉

カリヤス 藎草と叫ぶ 乙列 露川

かじり馬車や陸の月より 乙列 北嶺

出女やとどろき 乙列 同

赤の花や舞ふ 乙列 乙列

阿叟小園日私さあけしと

草の心決めひかす

八重の扉一志 羽黒 呂丸

高灯籠 千那

夕きりや川をひわく 正秀

風 同

秋の夕日 文料

春曾塚 文料

木曾殿と背おるはなを  
又玄

お花や改ちあはれは  
楚江

夏菊やあはれはし  
智月

振にゆくはあはれは  
閻如

燦ももや座の  
夕可

娘追善

草花のそと  
均水

馬の年すなめく  
ま考

風陽が小舟風雅よ

進ま解

油新しくあはれは  
同

ま楽和食のあはれは  
昌房

稲妻や颯か  
卧高

紫花のこころは  
キ角

鯨年やまの  
同

初秋や篠葉  
木枝



さしゆくを難くもまろ水の徒 如し

唐報の美をたたくと日又 堅 成秀

葉のたや小をよりつる後 史邦

片を事くたもばくも深く 竹戸

魂なりふくや物秋のお白く 野童

山吹やぬいひさきま 葉半

一海りて行人をそんたせ 尚白

骨わたるを圍のうき 里東

五文字の大海の又ある海 もたれ

作者も行の一字として 螢火一点の無明

とのことこれ むら

青 益 や 姐 板 よ 文 若 荷 卧高

わ 向 風 情 と 志 る 人 も あ ま さ け ね と

少 の よ り こ の る よ 何 そ ひ て 何 れ く

言 ひ 何 れ 唐 か 一 と 何 れ 執

おのふびく句らるる人のさす  
ましとて後句なりし

松山よきまなほのまはるる 鶴鶴

おのふかき寺の小僧をらるる 念誦礼  
讚しむるやまのまはるる 風雅し  
るるのまはるる かくはるる 月おれ境  
界とらひのまはるる 胸中をらるる 知  
解しむるまはるる

○附句の附と附とを論として松系乃と

は黄ゆる鶴とてし如意輪の像れ頰杖

もろとてし句のかへりある前句をらるる

しりし附句をらるる鶴とてし句と

小季の歌とて附句をらるるおのふとてし

かゝる殊のともわらるるまはるるにまはるる

し

○世の景氣附とて附とてしまはるる

界とつひせむ胸中をこころしく知  
解しむるは

○附句の附と附を論とてし松葉乃と

は者ゆる體をこころひ如意輪の像に類杖

もうこととつ附の附をいある前句をを

しつり附の附をいある前句をを

小季の附と附ををいある前句をを

かゝる附のともわつるはこころしく知

ひ

○世は景氣附とつ附とをいある前句をを

○走 <sup>ハリ</sup> 敵よせまおしきく松乃音  
有ぬのやうらあひるあそらう

○響 <sup>ヒキ</sup> 夜ゆ乃雉子と山う林葉う  
五む十しゆあそそしまの風

○馨 <sup>ニホヒ</sup> 霜の葉乃ひのかかまよ凡  
後心の初よ越る鈴鹿也やま

○後無心の道人あらし海よりとんとむつと  
無新住心のそらうらまふ附とそらも西よの

う終一わらすや

○一句のきとて終ふとまらうととむれと未熟

れゆらうゆふまゆし月うたた林葉を馬の口

とらうくととあす三と支考うりつらとたうよ

くふふととあまむしむしと一句はとぬまひ

うかうたうと有ぬとらうらうととさうまけらうと

○さうらぬのそと句とたわんふまや

まわらぬあてやしむぬ秘 <sup>アニカイユ</sup> 智月

慈心くつふより猶や富士の雲 智月

大津の禪尼をのみこめり東武の行と送れ  
家ともや人のなきをのまほしく心もあはれんことを  
しりく先と昔きおをらざらんじの恩愛して  
次とみよとらふしつり義方おらと世の人あ  
終つ子をばこつし母と恩愛つたゆりなれ  
まをせつしつらもたぬしつら人の化家子  
何うともふしつらもあはれみよの起ミチ居よ心くつらと

きつてアつくつたのまらをやもからとくじあ  
よと母り教ふしあはれとまらわくし

昔とあはれそ蘇ナチの心をたぐりませ 已百

かゆ深まの思ふとばさしつらまはふ比り  
何しつらとまらあはれ人のあはれくしと唐ナチはす心  
まら三日の月といふ心あはれよとあはれふら蘇

乳麩の下たるとまらつらあはれ

是と曲水亭よと夜をこしつら題の発句也

さうは天和の國とては禁苑は桃の比世句  
トミタリ〜都のさうら玉吾妻落〜  
ゆ〜人〜のな〜や〜さ〜ら〜  
う〜ら〜の世〜ら〜りよよか〜さ〜  
き阿婆お若ら〜さ〜ら〜ら〜ら〜  
金源とら撰集とら〜ら〜ら〜ら〜  
を

自桃や雪もどらぬ水の色 桃隣

緋桃を火の〜おぬと自桃を〜  
よちの〜〜〜薪水の旁とらと  
ま〜ひ句の〜阿婆よ〜  
ら〜ら〜

世〜ら〜ら〜ら〜ら〜

名月也比を〜夜〜

必〜ら〜ら〜ら〜ら〜

〜固〜ら〜ら〜ら〜ら〜

る

○凡雅と一句のまじはる所風俗なるべし  
一た  
へ意の害とくとも詞の雅とゆるはらまや  
むくく舞もあはれの駒と後とさすさ  
そのぬらひすもや今の人こはるを  
は飽すく染るくもめらとく一句の意味  
あらすとくは

からと寝を人味方り糸の女昂花 史邦

○馬上は<sup>ホ</sup>樂を横て吟と人とも今の世  
あまのつゆ〜 城味方り〜 けくろと寝とん  
とくは世昂の凡俗なりすや阿叟も何  
か〜 候とゆりた右十八ははがひ  
と深く武具の櫃よれとんあやかり  
名とさめく草のゆるまよも幾秋れ  
向といあ〜

本拈の地よりく落とめけぬ 去来

尾の荷字々木か〜二月の月れあさちり  
くしり侍りきとくの時ぬよのたのらまじお  
とと〜つ〜駐り〜を阿叟のけもあ  
えん化と二月の月よ心をとく免多れを  
時ぬの古今よ変さ〜姿な〜じと返<sup>三</sup>  
と〜ゆ又まの赤珠の叮嚀なれを唯地も  
落らぬと有くあま〜つら屋〜りされ  
○侍〜と〜

ね〜とあ〜の〜幾〜むらり 回

世句三四ひも〜や〜阿叟をり  
えれ侍〜よ〜今〜甲〜せ〜りよもか  
わ〜じ〜なり〜ふ〜君子もあま〜や<sup>ア</sup>呼  
○風雅をせよた〜あ〜も〜ひと〜分〜中  
も唯師あ〜聖人の<sup>イカダ</sup>椽よの〜じと作と  
らね〜も天地の介も〜あ〜を〜れを  
但歎息の餘音なり〜と〜り〜を阿



雙ハハヤシク先ハサキニ

○もろ人の凡雅の沙汰俵きしむはちり  
おもしろいおもしろいおもしろいおもしろい  
とらふはよかしくはねや句はくちりねかた  
し終つては聊くちりおぬ所何とぞ  
又あしぬめあふとぶ句の何とぞしり  
てやのまじもいおはるしりこのまじ  
めくぬくさうぬとふまじり先ハハヤ

ちのうしんとよりはよははるしり

○さうおんあふ人の會も句の所を何とぞ  
月夜の座を締つてふまじりあさや  
人々の位はあつたかおのまじり  
叶うの座あやおまかたうはねくまじり  
の老子もアさ秋はくをわはまじり凡雅のと  
よもかき

○今の人と所謂八月の情よとこれとあき

ちねいふも素言クハコトを聞も筆のハ何々ぬ人の  
 名よふそくかのかのくぬを何々むとやふ  
 ちねいのふを何々やねいふ人の交何  
 ちねい何々終よ美食の病何々なりぬ  
 〇居常ヨソフミの消息も妓童舞女の隠語をやうえ  
 ちねい何々のきうく後何々何々何々何々  
 〇風雅と道の階材なれと内ハ肝膽の理りわ

ちねい外ハ人物の情よ達るるれとかのき凡  
 雅を墻として世の利要よとよかむととる  
 ものち箇中の論よあつううか何々口は是  
 非何と阿叟ハ何々〇よ何々何々何々若モシ何々  
 〇のち吾ひと何々何々何々何々阿鼻乃口業  
 ちねい何々何々と於圖司之調柏堂而絶筆タツ

元禄壬申五月十五日

東行 餞別



世々後推きよ花よ五器一具 芭蕉

吾園に以て賤くおもむきの君子のふれ志

のひまふ所なりと今やわがこゝむと

さきよむまはるしき花さよめいりつ

人をもくしよめいりつ

ちよよこの別と花さよむじよやめいり

拵ゆき十成なりも奈古曾の

園の名をもくしよめいりつ

支考

モ、さきよむまはるしき花の伝

白河の関よえりくまふりの花よ 其角

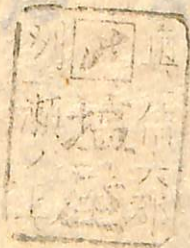
片方いりの眼かうしりよまよ 桃隣

釈支考真羽の面と強く志城イハキ

よむしり拵すまはるしき花の伝

ひねても味をりよめいりつ 露佐

一  
増尾  
毎足  
5



東寺町通二条  
升筒七庄番衆扱

